



いとすぎしまね

第29号 令和2年3月31日

島根県青少年赤十字賛助奉仕団

日本赤十字社島根県支部内 松江市内中原町 40 Tel 0852-21-4237



青少年赤十字加盟校普及に関する一考察

副委員長 岩井 元 康

賛助奉仕団の一員として少しずつ活動する中で赤十字の活動について私が日頃感じたり考えたりしていることを述べ、青少年赤十字加盟校普及について考えてみたいと思います。

その1つは赤十字の7つの諸原則の中には学校教育の目的・目標としていることに通じるものがたくさんあることです。たとえば、赤十字の合い言葉「いつでも、どこでも、だれにでも」と「すべての人に対し差別なく、苦痛をなくすよう援助する」という赤十字の基本的な「人道」の精神は「自分の大切さとともに他の人の大切さを認めることができるようになり、それが様々な場面や状況下での具体的な態度や行動に現れるようにする」とした人権教育の目標の考え方と一致しているのではないかと考えています。

もう1つは、青少年赤十字の態度目標「気づき」「考え」「実行する」は、児童・生徒が自主的で、自律した生活態度を養うために掲げられた目標ですが、今回の教育改革の柱となっている「主体的、対話的で深い学び」にも通じる内容ではないかと考えています。

このように、赤十字の基本的な「人道」の精神や青少年赤十字の態度目標が現代の学校教育の目標等に通じるものが多いと考えれば、

もっともっと青少年赤十字の加盟校が増えてもおかしくないと思います。現在島根県内では救急法や防災学習などの一環として赤十字の活動が生かされ、最近では安来第三中学校の防災学習への取組の例や、平田高校のJRC部の活動が地域の防災活動と連携した例などが注目されています。これらの例のように青少年赤十字の活動への理解が赤十字活動全体への理解に広がり、定着し、実行に結びつくことができれば、単なる知識・理解に留まらず、災害に対する備えや災害時にどのように行動すればよいかなどを自分自身で気づき・考え・実行することができると思われます。

赤十字の機構的諸原則の1つ「志願」は即ち「私的な博愛と奉仕的精神の現れである赤十字は、志願による救護機構である」とされ、自分の意志で強制されることなしに働くことを意味し、この原則から赤十字の活動は決して強制されるものではないことが分かります。しかし、赤十字の根底にある「人道」の精神が学校の教育活動の様々な場面に通じる考えであるとするならば、そのことへの理解が少しでも深まることによって青少年赤十字への加盟校が増えるのではないかと思います。普及の原点はここにあると私は考えます。

「赤十字ゆかりの地にて」

飯 塚 勝

広原委員長に同行し参加させて頂きました。自身5度目となる徳島でしたが、今まで全く知らなかった「国境を越えた博愛の地 板東俘虜収容所」を訪ね、新たな知見と感慨を得たことは私にとって大きな収穫でした。



期 日：令和元年 10 月 10 日(木)、11 日(金)
会 場：徳島シビックセンター(徳島市)
参加者：賛助奉仕団員 35 名、支部事務局他 4 名

1 記念講演

演題：「ハンセン病回復者との交流に学ぶ」
～無知からの偏見・差別～

講師：十川勝幸氏(徳島県ハンセン病支援協会会長)

かつて日赤徳島支部の局長を務められた氏の多年に亘る支援・啓発活動をもとにした講演に、改めてハンセン病について深く考えることができました。

2 JRC加盟校実践発表

テーマ：「地域に学ぶ減災・防災教育で主体的な態度を育成する取組活動」

発表者：大倉由香里教諭(徳島市立国府小学校)

学校における青少年赤十字活動の目標を「持続可能な社会づくりの担い手を育む、地域に貢献しようとする児童を育成する」と定め、組織的に減災・防災教育に取り組まれているのが印象的でした。

3 協議 テーマ

- ① 賛助奉仕団としての特色ある活動について
- ② 「人道」「人権」に関わる活動について
- ③ 防災教育の取組について

開催県の委員長から、本会の在り方を考える上でも協議の時間を大切にしたいと考え②を柱に設定したとのこと。「人道」と「人権」はどう違いどう関わるのか？そんな「そもそも」を考えるのはいい刺激になりました。人道精神に基づいて人権を守り、人権問題を解決することが人道の実践につながるということでしょうか。

4 視察研修

第1次世界大戦時に捕虜となったドイツ兵を人道的に待遇し「奇跡の収容所」と呼ばれた板東俘虜収容所跡地を訪ね、「赤十字ゆかりの地モニュメント」や「ドイツ兵慰霊碑」を見学し、鳴門市ドイツ館で赤十字人道紙芝居「ばんどうのコスモス」や展示によりこの地が「第九の里」と呼ばれる由縁を知りました。人道精神を実現した松江豊寿所長については、「二つの山河」(中村彰彦著 文春文庫)に詳しい。



令和元年度 島根県青少年赤十字指導者講習会

島根県青少年赤十字指導者講習会を賛助奉仕団の研修会の一つとして位置付け、毎年団員が参加しています。本年度は、群馬県高崎市教育委員会教育長の飯野眞幸氏による「いじめや不登校問題について青少年赤十字ができること」と題した特別講演や、出雲市立河南中学校校長大國哲也氏による「学校の教育活動全体で取り組む「命の大切さ」を育む生徒の育成」と題した研究発表等がありました。



だからこそJRC

花 田 紀美江

青少年赤十字指導者講習会で群馬県高崎市教育委員会 教育長 飯野眞幸氏の特別講演「いじめや不登校問題について青少年赤十字ができること」を拝聴した。概要は以下のとおりである。

いじめの件数はどんどん増えており、その多くが言葉によるものである。そして、いじめが原因の悲劇が繰り返し起きている。いじめ問題が発生すると法的責任が問われることもあり、未然に防止することが大切で、それにより学校本来の業務にも専念できる。

高崎市教育委員会では「学校におけるいじめ防止プログラム」を作成し、保護者、地域と連携していじめ根絶に積極的に取り組んでいる。例として、子どもたち・保護者へのア



ピールリーフレットの配布、法的観点からいじめ被害者の人権や加害者の責任を考えさせる法教育の授業、校種別にいじめ防止ポスターを募集しポスター展を開催、生徒・教員の研修会や会議、いじめ防止推進本部を校長室に置き駆け込み寺的役割を担わせていること、各校にいじめ担当教諭を置いたこと等を挙げられた。

最後に、いじめは人の心や体を傷つけ、時には命にもかかわる許されないことと宣言し、青少年赤十字のめざすことと一致している～だからこそJRCだと結ばれた。

インパクトが強い取り組みが多く、参考になった。



学校の教育活動全体で取り組む

「命の大切さ」を育む生徒の育成

～「ともだちのうた」の継承と発展を通して～

出雲市立河南中学校 校長 大國 哲也



昭和 25 年 4 月 1 日に島根県簸川郡神門村・神西村立河南中学校が設立されてから 70 年が過ぎました。この記念すべき年（令和元年度）、「命の大切さを学ぶ 3 大プロジェクト」と名付けた取組を行いました。その一つに「ともだちのうた」の継承があります。

平成 23 年 3 月 11 日、未曾有の被害を出した東日本大震災が発生しました。当時の生徒会長高見維吹さんは震災支援に立ち上がりました。様々な取組をする中で岩手県宮古市に同じ河南中学校があることを知り、支援策として宮古市立河南中学校との交流を考えます。その中で出てきたことが歌による復興支援です。全校生徒から集めた言葉をつなぎ合わせて歌詞を作り、当時の音楽教員が曲を付けて完成したのが「ともだちのうた」でした。この取組については、平

成 23・24 年度の日本赤十字社島根県支部青少年赤十字研究指定校を受けた本校が平成 25 年度に実践発表をしており、その具体的な内容は、平成 25 年 3 月 31 日付け青少年赤十字 S H I M A N E 第 104 号に掲載されています。

この「ともだちのうた」は文化祭や卒業式で歌われ、宮古市立河南中学校との交流活動も続いています。しかし、年月の流れは、この取組を形骸化させる心配がありました。昨年、校長として河南中に赴任した私は、この歌や交流の意義を「今の」生徒に伝えたいと思いました。そのため、7 月、高見維吹さんをお迎えし、この歌ができた経緯や想いを話していただきました。また、8 月には生徒会代表 3 名と職員で宮古の河南中学校を訪問し、宮古の生徒全員と交流して帰りました。そして、これらの活動の

文化祭終了後には、多くの生徒が「ともだちのうた」をいつまでも歌い続けていきたいとの感想を書きました。なお、この度



の交流事業につきまして、日赤島根県支部様から多大なご支援をいただきました。改めてお礼申しあげます。本当に、ありがとうございました。

作詞 河南中学校生徒会
作曲 吉田健司

離れていても　想っているから
君のことも　想っているから
どんな時も　想っているから
君の明日を　想っているから
君の喜びや　想っているから
近くにいる　想っているから
だかからに　歌うよ　声の限り
君のからだ　に力がある　沸きたつ
いつも一つ　の言葉で　ずっと
遠い君に届きたい　このともだちのうた

悲しいことも 苦しいことも
 全部分け合えば 小さなかけらに
 そのかけらを 歌にかえて
 ちからにして 君に届けたい
 君が笑ったら その声が風に乗って
 誰かの心に届くよ みんなつながってる
 だから君に歌うよ 声の限りに歌うよ
 君の心に明かりが 灯るように
 いつも一つの言葉で ずっとつながっているよ
 笑顔の花で包もう このともだちのうた

このともだちのうた
このともだちのうた

私たちは、先輩方が築いてこられた「心の交流」を伝統として引き継いでいきます。

島根県青少年赤十字賛助奉仕団研修会 I

～ “みずうみ赤十字奉仕団” との合同研修会～

加納美術館にて

本年度島根県青少年赤十字賛助奉仕団では、研修会として 10 月に加納美術館の鑑賞会を企画しました。今回は賛助奉仕団と同じく島根県の特設赤十字奉仕団のひとつである“みずうみ赤十字奉仕団”の皆様を研修会にお誘いし、合同で研修を行いました。また、みずうみ赤十字奉仕団が 11 月に企画された「高尾小学校落語鑑賞会」には賛助奉仕団をお誘いいただき、一緒に楽しいひとときを過ごさせていただきました。

幸せは何でもないこの日常

清水 正顕

秋のあたたかな日差しの中、風に揺れるススキの穂に誘われるように広瀬から布部に向かうと、落葉した桜並木と清流に囲まれて加納美術館がありました。到着すると、鳥取から大型バスの観光客もいて玄関付近は賑わっていました。

みずうみ赤十字奉仕団の皆さんも加わって総勢 9 名は神英雄館長の案内で、企画展の葉祥明原画展へ。美術の専門家である神館長さんの思いの詰まった見事な解説に絵本作家・葉祥明の世界にみんな引き込まれていきました。葉祥明は優しさのあふれた作品を通して、幸せの意味、平和の意味について問いかけていました。色紙には印象深いメッセージがちりばめられ、「幸せは何でもないこの日常、幸せは変わりのないこの日々、それが失われたとき、人は初めてそのことに気づく。」「がんばってね！は励ましのことば、しかし、そんなに無理してがんばらなくてもいいんだよ！と言ってあげるのも大切な励ましです。」など幸せや愛を慈しむ言葉にたくさん出会いました。

次に加納莞薔の展示室では、莞薔の娘である名誉館長の加納佳代子さんからお話をいただきました。加納名誉館長は、かつて姉と広島に住んでいたころ学生赤十字奉仕団で活動しておられたこともあって、懐かしそうに笑顔でお話をいただきました。ちなみに飛び入りでお話を伺ったご主人



は、かつて中国・四国地区学生赤十字奉仕団の会長を務められたそうです。

加納名誉館長からは、独立美術展作家としての莞薔、そして「目には目をではなく、許し難きを許す」という崇高な行為を導き出された平和主義者としての莞薔、さらには児童憲章を制定するなどの地域の人権思想の普及に尽くされた布部村長としての莞薔など、父娘として共に過ごした頃のエピソードも交えて楽しそうにお話をいただきました。みんなが改めて莞薔の多岐にわたる活躍や業績に圧倒されてしまいました。

昼には隣のレストランで食事会。ここではみんな開放感も手伝って大いに話が弾みました。元同僚や友人の話題では、参加者がいろいろな縁で結ばれていることに気づき、お互いの親近感が増した楽しいひとときになりました。

食事後は自由解散となりましたが、みんな再び入館し、おのおのの場所でゆったりと鑑賞する姿が見られました。みずうみ赤十字奉仕団の皆さんと一緒に、深まりゆく秋の中で心に触れる研修会となりました。

愛と平和の美術館を訪ねて

豊田 智恵子

谷川のせせらぎが心地よい閑静な美術館・・・
加納莞菴先生の家である。毎年5月には三島房
夫先生が、莞菴について新聞に投稿されており、
以来私は当館を訪れていつも癒されている。今回
は研修の一環として、莞菴先生の作品を鑑賞しな
がら、館長ご夫妻から詳しくお話を聴くことがで
きた。

莞菴先生は、1949年フィリピンのキリノ大統領
の書簡で「許し難きを許す」という奇跡を念じ
て、フィリピンの戦犯赦免の努力をされ、1953年
キリノ大統領声明で日本人戦犯赦免が、「平和の教
訓」として広く認識されたという事を聞き、莞菴
先生の愛と平和への想いと願いに深く感銘を受け
た。

折しも企画展では、葉祥明の原画展「平和への
祈り」が開催されていた。心に残った主な作品
は、チェルノブイリ原発事故で作家の無言の訴え
が感じられる絵や、東日本大震災で被災された方
が、一日も早い復興を祈った絵、「地雷ではなく花を
ください」の絵本は、売上金が地雷撤去不発弾除
去に使われて、多くの方の支援が繋がったとの事
であった。

この研修を通して学んだ事は、悲痛な叫びを共
感すると共に、自らの死生観を再度見つめる事が
出来た事である。微力ではあるが、今何が出来
るのかを考えて、次の世代の子供達や若者達、地
域住民の方々に赤十字活動を通して、私なりに出
来る事を続けたいと思っている。



加納美術館を訪問して

金森 詞子

秋季研修会で加納美術館を訪問されると知り、
参加するかどうか迷っていたところ、恩師である
豊田先生に誘っていただきました。それまで、加
納美術館は度々新聞等で報道されており関心はあ
りましたが、近場にありながらも一度も訪れたこ
とはありませんでした。この機会に誘っていただ
いたご縁に本当に感謝しています。

当時は、「葉祥明 原画展「平和の祈り」」が企
画されており、地方では見ることのできない原画
に直接接することができました。一方で、美術館
に常設されている加納莞菴画伯の作品から戦争の
怖さや惨めさ、悲しさ、そしてそんな日々のなか
にある幸せもが強く伝わってきました。「平和な毎
日は当たり前ではないのだ」「世界中の子供、大人
が笑って生活できるような世界が早く実現してほ
しい」と心から願いました。参加させていただき
ありがとうございました。



祝

2019年「山陰中央新報社地域開発賞」受賞

長年に渡って赤十字に貢献され、賛助奉仕団員でもあります**本田坦氏**、JRC活動のご指導にご尽力されています平田高等学校の**片岡初美氏**のお二人が受賞されました。

社会賞

貴重な時間

～山陰中央新報社より表彰を受けて～



本田 坦

昭和34年(1959年)頃の夏のことだったと思う。「人工呼吸の替り手がないので、すぐ来てくれないか」との電話がかかった。場所は支部近くの北松江に向かう途中の、やや大きな溝にかかっている木の橋のたもとの狭い道路だとのこと。近いので自転車に乗って現場にかけつけた。中学生がうつ伏せになり、その脇腹付近にまたがって背中を押す人工呼吸が行われていた。自転車が橋の欄干に引っかかり、その生徒は溝の中に落ち込んだ。深くはないが水位があったため、外傷はなかったようだった。さらに幸いなことに、生徒が溝に落ち込むのを目撃していた人がいたことである。すぐに溝の中に入り、近くの人の手を借りて溝から引き上げ道路に横たえていたのである。しかし、人工呼吸を知る者、勿論できる者もいなかったために、生徒の中学校へ電話をしたわけだ。水泳でもJRCでも著名なS先生がかけつけ(おそらく10～20分位はかかっていたと思われる)、先に述べたように背中を圧迫する人工呼吸(セーファー法)をしていたのだ。1960年前後は、人工呼吸の必要は知られていたが、その方法は用手人工呼吸だったのだ。呼吸停止者には可能な限り多くの空気を肺に入れようと各国が研究をして、その時期で一番効果的で換気量が多いニールセン法が、赤十字の組織を通して普及しつつあったのだ。勿論、日赤でもニールセン法に切りかえている最中だった。

本田が現場にかけつけ、生徒のうつ伏せの姿勢はそのままにして溺者の両肘をたたみ、両手の甲

を上向きで重ね、顔を横向きにするような姿勢に替えた。方法は、溺者の頭側から背中を圧迫し、圧迫をゆるめた後溺者の両肘を術者が両肘を持って後に少し体をそらす、という動作(一度深呼吸をさせた格好になる)。S先生と交代をしてニールセン法で人工呼吸を続けた。溺者の顔は暗紫色だったが、すーっと青白く変わった。廻りをとり囲んでいた人々の中には「生き帰った」と声を出した者もいたが、逆算してみると生徒(溺者)を溝から引き上げるのに要した時間、S先生が到着するまでの時間、本田が現場に行くまでの時間、これに連絡に要した時間を考えると、短く見積もっても30分以上はかかっていると判断せざるを得ない。本田はすぐに支部に引き返し、救急車を運転し、松江日赤まで生徒(溺者)とS先生を搬送した。

約60年も経って思い出されるのは、この時救助に携わった者がすぐ人工呼吸をしていたら、あるいは最近のように心肺蘇生が知れわたり、すぐに実施していたなら、助かっていたかもしれない。溺者に直ちに手当を要する貴重な時間を残念ながら失ったわけである。時代の変化とともに、救命手当・応急手当も進歩し、この年から10年位経ってから消防の救急業務が始まった。

赤十字は命を守り、自助共助を一層広げるために救急法や水上安全法、幼児安全法などの普及をしている。

本田が、指導員となって普及を始めて60年経っているが、少しは役立っていたのだろうか。

このたびは山陰中央新報社地域開発賞教育賞の受賞にあたり、たくさんの方々からお祝いの言葉をいただきありがとうございました。でも私は『気づき・考え・実行する』を口ぐせにしていただけで、頑張ってきた歴代の生徒たちと地域のみなさんへの顕彰だと認識しています。

その『気づき・考え・実行する』を合言葉にどんどん変化していく生徒たちを追跡調査したところ、2018 年度教育実践論文優秀賞を受賞し、『気づき・考え・実行する』がいかにより大きな効果をもたらすのか客観的に認められた、という講評をいただきました。全国の教育委員会指導主事の研修会でも発表させていただきました。賛助奉仕団の大先輩方が築いてこられた活動を、私も微力ながら継承できればと思い、ここに概要を報告します。

● 目的

『気づき・考え・実行する』を合言葉に活動した「生徒自らの成長」と「社会的な成果」との両者を追跡し、主体的活動の有効性を明らかにする。

● 追跡項目

『気づき・考え・実行する』ことによる変化

- (1) 活動内容の進化・深化
- (2) 生徒の変化 ①人物的な変化 ②欠席、遅刻、早退の回数 ③成績 ④トラブル対応力 ⑤言葉や行動 ⑥企画力
- (3) 集団の変化 ⑦活動 ⑧部員数 ⑨資格取得者 ⑩受賞歴
- (4) 社会的成果 ⑪地域での存在 ⑫ 地域からの声のかけられ方 ⑬全校生徒や地域住民の変化 ⑭卒業生の社会貢献

● 結果（抜粋）

- (1) (3) 災害対応啓発は、呼びかけ型 → 発表型 → 実演型 → 体験型 へと進化・深化し、格段に効果が上がりました。全国でも先進的な『体験型』を、年間のべ1 万人が体験するようになりました。

- (4) ⑪ 連携 約50 団体

- ⑫ 声のかけられ方の変化

「地元へ出るようになったね」

→ 「いつもがんばっちゃーね」

→ 「ボランティアで手伝ってほしい」

→ 「一緒に活動しよう」

→ 「企画段階からやってほしい」

- ⑭ 卒業生たちは、ボランティア団体、NPO 法人、ベンチャー企業等で活躍する者が急増しています。

● まとめ

合言葉『気づき・考え・実行する』は、「私たちを信じてもらえれば、何でもできるようになります！」と自信をもって失敗と成功を重ね、社会でしなやかに生きていく生徒自らの無限のエネルギーと、それが周囲や社会へ与える効果も無限であるとわかりました。

● おわりに

私は医療事故により障がいがあり、通常の体を張った関わりができないので、ただ合言葉で応援するスタンスは好都合でした。生徒が初めて主催した年は、私はまだ安静中。生徒は私の復活を待ちきれず、自分たちで地域の有志を招き、企画会議を立派に行っていました。

『気づき・考え・実行する』合言葉は、生徒からも、私からも、広めていきたい“ことのは”です。



島根県青少年赤十字賛助奉仕団研修会 II

～ " みずうみ赤十字奉仕団 " との合同研修会～

高尾小学校 落語鑑賞会

「高尾小 にこにこ寄席」に感動

立花 久紀

11月12日、支部を会場にみずうみ赤十字奉仕団・青少年赤十字賛助奉仕団主催の「高尾小防災チャリティー寄席」がありました。会場は子どもたちの落語を聞こうと、60名あまりのお客さんでいっぱいでした。私が高尾小の児童の落語を聞くのは、昨年の指導者講習会に続き2回目です。子どもたちの落語がまた聞きたくなり参加しました。

奥出雲町立高尾小学校は全校児童9名の学校です。平成25年に着任された教頭先生が、子どもたちに表現力や物怖じしない心を育てたいと考え、落語を学級経営に取り入れられました。当初は中学年だけでした



が、その後全校での取組となり、7年目を迎えた今年度は笑いと健康をテーマにした寄席や日赤島根県支部とタイアップした「防災寄席」、警察とタイアップした「防犯寄席」などを年間30回ほど展開しているそうです。9月には日本学習社会学会の依頼で、東京での公演も行っています。

出演した5・6年生の4人は場をたくさん踏んでいるので、高座のしぐさも落ち着いていて、身ぶり手ぶりを交えて表情豊かに話します。感心したのは、行った先々でマクラやネタをアレンジできることです。松



江城・堀川遊覧を登場させたり、出雲弁を巧みに使ったりした落語がありました。いったいいくつ持ちネタがあるのだらうと思いました。東京オリンピックのマラソン会場が札幌に変更になった時事ネタを入れ、I O Cのバッハ会長や小池都知事が出てくる落語もあり、会場は終始笑いがあふれていました。

今回は西日本豪雨被災地に義援金を送ることを目的としたチャリティー寄席だったので、たくさん義援金があつまったのではないのでしょうか。高尾小のチャリティー寄席や防犯寄席は素晴らしいJRC活動だと思います。私は以前奥出雲町内にある学校に勤務し、高尾小と交流していたご縁もあり、これからも高尾小学校の活動を応援したいと思います。



NHK歳末・海外たすけあいフェア



たすけあいの心を一つに

川津 愛子

恒例の年の瀬のイベント「NHK歳末・海外たすけあいフェア」に賛助奉仕団の皆さんと一緒に参加しました。

参加者は地域赤十字奉仕団(婦人会)、みずうみ赤十字奉仕団、島根大学学生赤十字奉仕団の方々、私たち青少年赤十字賛助奉仕団メンバー、また松江赤十字病院、乳児院、血液センターなどの方々もスタッフ参加されています。私たち賛助奉仕団には松江銘菓、お茶、かまぼこなど業者さんからの寄贈品を市価の何割引きかで販売する専属ブースがありますが、いきいきプラザ島根のメイン会場でのバザー担当になることもあります。こちらは分類、陳列、

値段付け、販売と体力勝負の感がありますが、ともにフェアを盛り上げていく一体感が味わえます。昨年末はキッズコーナーの担当になり、かわいらしい子供服や絵本、ぬいぐるみなどに囲まれ、走ってやって来る子どもたちの愛らしさ、健気さに癒され、疲れも吹き飛びました。

また、年々外国人の方の姿が増え、松江という地方都市の変化、グローバル化をこのフェアでも実感しました。そして子どもたちのおもちゃ愛はどこ国も同じです。お父さんやお母さんの子どもたちへの愛にあふれたまなざしも同じです。そんな幸せな気持ちも味わいました。



編集後記



お忙しい中ご寄稿をいただきました皆様に、心よりお礼申し上げます。本年度はこれまでの活動に加え、他団体との共催などで多様な研修会が企画されました。賛助奉仕団の活動の広がりの様子が、お寄せいただいた原稿や事業報告から窺え、読み応えのある内容になりました。

このところの新型コロナウイルスの広がりにより、先の見えない状況に心がふさがちになります。本誌にもありました葉祥明の、「幸せは何でもな

いこの日常」という言葉を、改めてかみしめるこの頃です。世界の人々に「普通の日々」が一日も早く戻ってくることを心から願っております。

金崎 智枝

編集委員

岩井 元康 金崎 智枝 川津 愛子
中澤 悦子 花田 紀美江 広原 啓視

令和元年度 賛助奉仕団事業報告

事業名	期 日	場 所	備 考（参加者等）
役員会	4月5日（金）	日赤島根県支部 （松江市）	総会および研修会について
青少年赤十字加盟登録式	4月22日（月）	安来市立第三中学校 （安来市）	各日ともに1名参加 加盟登録式にて赤十字の話、肩章の贈呈
	4月26日（金）	出雲市立湖陵中学校 （出雲市）	
	4月26日（金）	出雲市立河南中学校 （出雲市）	
	5月27日（月）	安来市立広瀬中学校 （安来市）	
赤十字運動月間広報キャンペーン	5月12日（日）	一畑百貨店（松江市） イオン松江店（松江市） ラピタ本店（出雲市）	4名参加 赤十字への協力呼びかけ、カットパン配布
総会・研修会	5月30日（木）	日赤島根県支部 （松江市）	16名参加 総会（午前）：30年度事業報告及び決算報告 令和元年度事業計画案及び予算案 研修会（午後）：「平成30年7月豪雨災害における 日赤の救護活動について」支部職員
島根県青少年赤十字指導者協議会 役員会・総会	6月5日（水）	サンラポーむらくも （松江市）	委員長出席
支部赤十字奉仕団委員長協議会	6月20日（木）	日赤島根県支部 （松江市）	委員長出席
いとすぎ見学会	6月27日（木）	松江市立本庄小学校 （松江市）	6名参加
全国青少年赤十字賛助奉仕団協議会 役員会・総会	7月8日（月） ～10日（水）	日本赤十字社本社 （東京都）	役員会：団員1名出席 総 会：委員長1名、団員1名出席
島根県青少年赤十字リーダーシップ・ トレーニング・センター	8月6日（火） ～8日（木）	島根県立青少年の家 （出雲市）	4名参加
第10回赤十字救急法競技大会	9月30日（日）	島根県立武道館 （松江市）	委員長 来賓出席
第5ブロック 青少年赤十字賛助奉仕団 連絡協議会・研修会	10月10日（木） ～11日（金）	徳島市シビックセンター	委員長および監事1名参加
秋季研修会	10月31日（木）	加納美術館（安来市）	7名参加
落語鑑賞会 災害時高齢者生活支援講習	11月12日（火）	日赤島根県支部	奥出雲町立高尾小学校児童による落語鑑賞会 児童とともに講習の受講
防災スクール	11月27日（水）	安来市立第三中学校 （安来市）	1名参加 災害時高齢者生活支援講習の指導補助
島根県青少年赤十字指導者協議会・ 青少年赤十字賛助奉仕団三役会	12月10日（火）	日赤島根県支部 （松江市）	役員4名出席
NHK歳末・海外たすけあいフェア	12月15日（日）	いきいきプラザ島根 （松江市）	6名参加 バザー用品の提供、バザー会場の運営、 寄付品販売
児童福祉施設支援金	12月		支部を通して県内13か所の児童福祉施設へ
特別義援金	随時		各種災害義援金
島根県青少年赤十字指導者講習会	2月13日（木）	サンラポーむらくも （松江市）	12名参加
役員会	3月10日（火）	日赤島根県支部 （松江市）	「いとすぎしまね（第29号）」編集 令和2年度総会・役員会について